

## 第17回日本古典籍講習会 参加報告

上 田 夏 実

2019 年度実施の講習会に参加させていただいた。  
ついては、その内容を以下のとおり報告する。

### 1 概要

#### (1) 主旨

日本古典籍の整理・目録化を促進し、広く活用されるよう環境の整備を図るために、各所蔵機関の図書館員等を対象として書誌学の専門知識や整理方法の技術修得を目的に研修を行うこと。

#### (2) 主催・期間

人間文化研究機構国文学研究資料館

国立国会図書館

2019 年 7 月 2 日(火)～5 日(金) (計 4 日間)

### 2 実施内容

#### (1) 講義タイトル

「はじめての古典籍」「くずし字について」

「写本について」「版本について」

「蔵書印について」「絵入り本について」

「装訂・料紙について」「表紙の文様について」

「江戸の出版文化」「幕松明治の出版文化」

「国文学研究資料館和古書目録データベースの作成」

「日本語の歴史的典籍のデータベースについて」

「国立国会図書館における和古書書誌データ作成」

「国立国会図書館における古典籍資料の電子化」

「図書館における資料保存」

#### (2) 実習タイトル

「国文学研究資料館 和古書目録の作成」

「四つ目綴じ・簡易帙の作成」

#### (3) 見学場所

展示室、書庫・燻蒸室

#### (4) 研修概要

##### <写本と版本>

古典籍の取扱いおよび書誌学への取組みにあたっては術語（専門用語）を正しく理解し、古典籍関係者の共通認識を持つことが大切である。今回の研修において、『日本国語大辞典』（第二版）（小学館）および『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、1999）にて記述されている説明を古典籍（もしくはそれに関する単語）の定義とした。また、書誌学は「書物を対象とした文化的な研究」と規定され、一つの資料だけで完結するものではなく、異なる資料を比べる学問である。先入観を持たず、目の前の資料があるがまま正確に記録することが求められる。

古典籍は写本と刊本に大別される。以前は刊本を含まないとされていたが、1990 年代以降は刊本も書誌学の範囲とする動きがあり変化している。写本は原則的にタテに連鎖していくものであり、諸本を系統立てることが第一だ。人の手によって写されていくものであるため、その過程で本来の写本元とは異なる内容で写されてしまう可能性がある。そして、受け継がれていくものは本文であり、外形的な諸要素は用をなさない。著名な書家等の文字を現代に伝える美術品としての価値も兼ね備えている。

一方、刊本では書型や表紙によって本文のジャンルが異なり、外形的な諸要素が最も重要である。技術の発展によるところが大きく、文化史的・文化資源としての価値を持つ。未整理資料を整理する場合は、写本と刊本を分けてから刊本をサイズ毎に分け、次に表紙で分けて整理すると良い。漢籍との区別として、一般的に中国書は表紙が薄く、紙が弱く、綴じ穴は 4 つであるものが多い。加えて朝鮮本はサイズが大きく、型押ししてある黄色い表紙で綴じ穴が 5 つであるものが多い。

しかしながら、写本・版本共に書誌を取る上では装訂と料紙が基本的な事項であることに変わりはない。世界の書物の中での日本の古典籍の大きな特色として、装訂が多様であること、古くからの装訂が

後代まで継承されたことが挙げられる。着色されているものは二酸化炭素燻蒸すると化学反応で色が変わってしまうことがあるので注意が必要だ。

さらに、直接書誌に取られることはほとんどないが表紙に文様が施されているものがあり、柄・色・素材によって資料の内容や文化史的意義を深く理解することができる。

### ＜江戸時代以降の出版文化＞

早くから印刷が進められた大陸と違い、日本では17世紀以降に版本が主流となるが、江戸時代を通して依然として写本も制作され続けた。写本が重視された理由としては、以下のようなものが考えられている（堀川貴司『書誌学入門―古典籍を見る・知る・読む―』勉誠出版、2010年）。

- ア 写本を版本より上位に見る意識があった
- イ 有名人あるいは公家・書家などの筆蹟を尊重する意識があった
- ウ 写本でないと流通できないテキストがあった
- エ 一般への流布を嫌うテキストがあった
- オ 多くの人が自分自身で書物の作成をおこなった

写本に重きを置いた日本古典籍を取り扱うためには、くずし字を読解する必要があるが、相当の修練を要する。書かれている文字が漢字なのか仮名なのかを判別するために変体仮名の字母を覚えることから始めると良い。版本が流行りだした頃に続け字をそのまま版本に彫ったものがあり、写本を再現しようとしたことが窺える。

江戸時代の本屋は出版・流通・小売り・古本屋を全て担っていた。本屋自身が版元となるが、共同で版元となることが多かったため複数名の名前が記載される資料が多い。その中にも主版元となる書肆はあるが、印があっても主版元とは限らず絶対的にどれであるかを確定する方法はない。奥付けの最後に記載されている書肆が主版元である場合が比較的多い程度である。また、ある書物を正式な手続きを経て出版すると、板株となってそれを出版した本屋に権利が生じ、その権利は版本を売り払わない限り原則その本屋に属する。

さらに、本は商品となったため、派手な書袋をつけるようになった。客の目を引くと同時に立ち読み防止の目的がある。庶民も本を買うようになり、家で修理製本等を行う機会が増えた。それにより、表紙と中身が変わってしまっている資料もあるため、

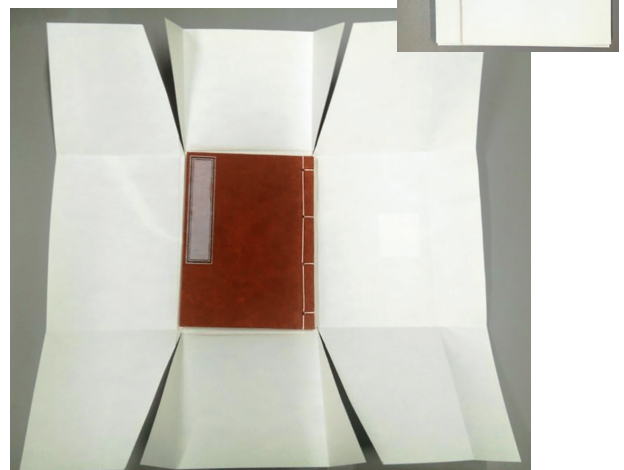
注意が必要である。

18世紀半ばになると、出版の中心が経済発展に伴って上方から江戸へと変化し、全国を市場として書物が流通していく。それまでと比べ物にならないほど、この時代の出版物量は増加し幕末にかけての残存率も高くなっていく。一般的に「和古書」として扱われるのは、多くこの時代の出版物である。近世前期またはそれ以前に原型があり、堅実に増刷を繰り返す素性の正しい「物の本」（宗教書・和漢の学問所・医学書）に対し、江戸出来の書物として、特に大衆向けの洒落本・草双紙・読本・滑稽本・人情本・咄本・狂歌本といった草紙類を、ローカルな出版物という意味の「地本」という名称を以て行われた。この「草紙」の入れ替わりの早さが出版全体の活性化を招いた要因のひとつという（橋口侯之介『和本への招待』第五章、角川学芸出版、2011）。

### ＜図書館における資料保存＞

国立国会図書館では、資料をできるだけ長く「利用できる状態」に保つことを目指し、状態の良い資料には予防を、劣化・破損した資料には手当てを継続的に行う。特に、受入前に必ず殺菌する等有害生物の回避と遮断を徹底している。資料が傷んでしまったから手当てをするよりも予防的な対策に重点を置き、保存方針に基づいて必要な手当てを過不足なく行うことで、資料の利用可能期間を延ばすことができる。

また、図書館で行う資料保存の1つとして、実習で簡易帙の作成を学んだ。1枚の中性紙に切り込みを入れるだけで完成するため、緊急時等の間に合わせとしての利用に適している。



### 3 担当所感

本館では図書担当の担当業務として一般書と和古書がある。通常業務としては一般書を主として扱うため、担当といえども和古書と触れ合う機会はほとんどない。また、そもそも触れ合い方がわからないものも多い。そんな状況を打破すべく、今回の講習会に参加させていただいた。

しかしながら、講習を受けていくにつれ、和古書を取扱えるようになるには経験を積むより他はないとひしひし感じた。本講習会での内容を心の支えに、本館未整理資料の整理に取り組みたい。

また、古典籍の世界は奥深く、未だ不明確な部分が残っていると伺った。たゆまぬ鍛錬をするだけでなく、研究者と共に我々図書館員も率先して資料の研究を進められれば理想的だ。

最後に、本報告で使用している文言・文章は一部講習会の配布資料に記載されているものをそのまま引用している。しかし、私の理解不足や思い違いで誤った記述があるかもしれない。その場合はご指摘いただければ幸いである。

(うえだ なつみ 図書館事務室)